「泣き虫じいじの物語」

鈴木　潔

1章

６０歳を一つか二つ越えた、ある秋。５年前に東京で結婚した娘から、帰ってくると電話があった。一時の帰省ではない。離婚したのだ。電話をとったカミさんは、娘との長い会話の後、ワシに受話器を手渡した。受話器の向こうですすり泣く声がする。娘の深い悲しみが伝わってくる。明るく笑顔が絶えなかった頃の顔が思い出せない。

「ごめんなさい。一生懸命努力して、我慢してがんばったの。でもどうにもならなくて……」

ワシらが育てた、がんばり屋の娘が言うんだ。間違いあるまい。

「そうだな。がんばってもダメなことはいくらでもある。何も言わんでいいから、帰って来い……マサトも一緒だな？」

「うん、二人で面倒掛けちゃうけど、ごめんね」

廃線寸前のローカル線、その中でもとびきり小さな無人駅大城に、午後２本目の電車が着いた。山あいから差し込む西日が、自動ドアを照らしていた。ドアが開き娘と、娘の手にぶら下がるように3歳くらいの男の子が降りてきた。

（マサトだ！ワシの孫のマサトだ！）

電車を降りワシを見つけた娘は、しばらくじっと見つめていたが、やがて口を押さえ立ったまま嗚咽し始めた。ワシもまた涙があふれた。娘の肩をたたき、大きな荷物を抱え、駅前に止めた軽トラックに促した。マサトはずっと母親のスカートの裾をつかんで離さない。生まれたときに一度会っているが、マサトにとってワシは初対面も同じ、どう接してよいかわからない。三人で車に乗り込んだ。助手席の娘に抱かれて座っているマサトの、小さな足が運転席から目に入る。

（ちっちゃいなぁ、ホントにちっちゃいな……）

たったそれだけでワシのどこかが反応して、また涙がにじんでくる。

家に着くとカミさんが玄関の前に立って待っていた。

「お帰り。おおー、あんたがマー君かね。今日は遠いところから、えらかったねぇ。疲れたろう。さぁさぁ、お入んなさい」

カミさんはそう言うと、車から降りてきたマサトを、何の躊躇もなく抱きあげ、頬ずりし家の中に連れて行った。

（あー、ワシもこうすればよかった……）

久しぶりにワシら夫婦は二人の家族を加えて食卓を囲んだ。ちょこんと正座したマサトの姿が愛らしい。折りたたんだ足がまだ上手く組まれていない。それだけでまたワシは目が潤む。いつかワシのあぐらの中で飯を食って欲しいと願う。食事中は二言三言会話が交わされただけで、静かな夕飯だった。そして二人ともついぞ笑顔を見せなかった。

（傷ついた娘と孫を、ワシは守っていけるだろうか……）

ふと不安がよぎったが、風呂上がりに寝てしまったマサトの寝顔を見ていたら、なぜか勇気がわいてきた。新品の家族がワシにパワーを与えたのか。

（マサトはワシの孫だ。ワシの家族だ）

ワシの家は三代続く兼業農家だ。ワシは役場に勤めて、カミさんがお茶やミカンを栽培している。土日はワシも手伝う。そんな毎日はこれまで同様、何の変化もなかったが、何か気分が違う。う～ん、なんと言ったらよいか。初めて親になった時と気持ちは似ているが、それとも少し違う。まぁ、そのうち上手い表現が見つかるだろう。

仕事を終え夕方家に帰ると、ひと月前は奥の部屋から顔だけ覗かせていたマサトが、今では

「じいじ、おかえり！」

と飛びついて来るようになった。そしてダッコ……その瞬間がワシの生き甲斐になった。忘れかけていた父性が目覚めてきた。不思議なものだ。マサトがこの家に来てからまだ1ヶ月しか経っていないのに、それ以前ワシは何を楽しみに生きていたのか思い出せない。きっと朽ちるのを待っている老木になっていたかもしれない。

ワシの娘が出戻ったという噂は、このたった４０戸の集落ではあっという間に周知のこととなる。口さがないばあさん連中のウワサ話は、しばらくの間我慢しなければならない。帰ってきた翌日から、娘はすでに畑に出てカミさんの仕事を手伝っている。マサトは母親とばあちゃんが仕事をしている間、そばでおとなしく一人で遊んでいる

という。カミさんは、大人の手を煩わせない、いい子だと言う。いや、それは違う。この年齢の子どもはあちこち走り回って親に心配をかけるものだ。この年代は親に心配をかける子がいい子なのだ。ワシは思う、マサトはきっと東京にいた頃から、ギクシャクし始めた両親の間で自分の置かれている状況を本能的に悟り、自分の生きていく術を知ったに違いないのだ。だからだろう、微笑はするが天真爛漫に大声でケラケラと笑うことがない。感情を上手く表せないのだ。不憫だ。また目頭が濡れる。よし！これからはワシがいろいろなところへ連れて行って、いろいろなものを見せて、いいものや面白いものをたくさん教えてやるぞ！そしていつか大声で笑う姿を見せてくれ！マサト、その時じぃじはきっとまた泣くかもしれんが、それは今までとは違う嬉しい涙になるはずだ。

今日は動物園。マサトを連れてもう5回は来てるだろう。カミさんが作ってくれた弁当、お茶の入った水筒、娘が持たせてくれたわずかばかりのお菓子。いつものように、象舎が目の前に見えるベンチでちょっと早い昼飯にする。靴を脱ぎ、ベンチに立ち上がり、おにぎりを頬張りながら象を眺めているマサトの姿は、子どもらしくてワシは嬉しい。明日は4歳の誕生日だ。そうだ、今日は帰りに売店に寄って何か買ってあげよう。動物園を出ると目の前に売店がある。

「今日は何か欲しいものを買ってやるぞ」

「いらない、欲しいものはない」

遠慮しているのだと思い、

「ほれ、ぬいぐるみでも電車のおもちゃでもいいから」

「いらない、何も欲しくないよ」

そう言うとワシをバス停の方へ引っ張って行く。それでもワシは何か買ってあげたくて

「少しくらい高くてもいいんだ。明日は誕生日だぞ」

するとマサトは怒ったような顔をして

「今日はじぃじといっぱい遊んだから何もいらない！」

ときっぱりと言った。その言葉にワシの体の、どこかわからない柔らかな部分が刺激を受けた。マサトに背を向けて泣いた。娘の言葉を思い出した。

「平日私とお母さんが仕事をしているとね、そばでマサトがシャベルで遊びながら、休みの日にお父さんと遊びに行った時のこと、嬉しそうに1日中話してくれるのよ。

ぞうさんのこと、キリンさんのこと、遊園地で乗った乗り物のこと、帰りの電車の中のこと……」

（そうか、マサトすまん。おまえは本当に喜んでいてくれたんだな。本当に満足すると他には何も欲しくないのか・・・物で無理矢理満足を与えようとしたワシがバカだった）

マサトに気づかれないように涙を拭い、

「よし、ママとばあちゃんのところへ帰るか」

「うん、ばあちゃんのとこ帰る」

電車の中で眠ってしまったマサトの顔を見ていると、ワシの心臓あたりがホンワカ喜んでいた。

2章

忙しい日常があっという間に過ぎ、マサトも2年保育で幼稚園に行くことになった。3年保育も考えたが、送り迎えなど、通わせる環境が整っていなかったため1年間待機した。入園式がだんだん近づいてくると、ワシは落ち着かなくなった。同級生は皆3年保育らしい。果たして仲間に入り上手くやっていけるのだろうか……ワシは夜も眠れぬくらい心配だった。

その日、大丈夫だからという娘を制しワシも入園式について行った。式が終わり教室に入る。先生がマサトを皆に紹介する。

「さぁ、今日から新しいお友達が来てくれましたよー。お名前はマサト君でーす。みんな仲良くしてねー」

と先生が紹介した直後、一人の男の子がマサトの手をつかみ

「遊ぼ！」

といって連れて行こうとする。マサトは一瞬ためらいワシと娘の方をチラッと見たが、後はなすがままだった。保護者は別室に連れて行かれ、新学期のスケジュールなどの説明を受けたが、マサトが心配で上の空だった。昼頃、急く気持ちを抑えながらマサトを迎えに行く。ワシらの姿を見つけたマサトがニコニコした顔で駆け寄ってきた。そして嬉しくてしょうがない、という顔で

「ケント君と、ユーキ君がねぇ……」

と矢継ぎ早に今日あったことを話そうとする。その様子は小さな体がはち切れそうなくらい喜びがあふれていた。息継ぎもままならぬほど、できたばかりの友達の名前を連呼する。

（そうか、そうか。都会で傷つき、娘と実家に帰ってきたマサトにも初めて友達ができたか……よかった、よかった。おまえが嬉しいとワシはその十倍嬉しい……）

幼稚園という小さな社会ではあるけれど、マサトが人の輪に加わることができたことは何にも代え難い喜びであった。ケント君とユーキ君に感謝。ありがとう……ホロリ。

秋、運動会。ワシら一家は総出でマサトの応援に出かけた。家族参加の障害物競走にワシも出場した。ライバルの参加者は若い父親ばかりだ。毎日自転車で１０ｋｍの山道を通勤しているワシにとっては何でもない。ヨーイ、ドン！まず５ｍ四方のネットをくぐり抜ける。次は麻袋に入ってピョンピョン走り、はしごのトンネルをくぐる。さらにおたまにボールを乗せ１０ｍ走り、そして平均台をクリアしてゴール！最後は足がもつれ、少し危なかったが１着だ。マサトを見ると友達の前で飛び上がって興奮している！

「勝った、勝った、僕のじぃじが１番だ！」

といいながら飛び跳ねている。体をそんな風に使って喜ぶマサトを見たのは初めてだ。今日はマサトに恥をかかせないように、父親の代わりとしてがんばったのだが……

（そうか、そんなに喜んでくれるのか）

マサトの喜ぶ姿はワシを泣かせる……マサトはこの一年でずいぶん子どもらしさを取り戻してきた。嬉しいときも悲しいときもほとんど同じ表情だったのに、今は素直に喜びも悲しみも表現できるようになった。母親はもちろん家族の力もあるが、幼稚園で出会った友達や先生の影響が大きいだろう。きっといい人たちに巡り会えたんだな……ありがとう、皆さん、ありがとう……子どもは家族だけでも、学校だけでも育てられない。周辺にいる人間たちがすべて関わってこそ子育ては成立する。これからもいい人、いいものにたくさん出会って欲しいとワシは願う。

マサトが我が家にやってきて３年が過ぎた。マサトの人生の半分をここで過ごしたわけだ。まだ、たった６年の人生だが、前半の３年間は決して幸福なものではなかっ

た。娘が少しずつ話してくれた都会での結婚生活は、娘だけではなくマサトにも暗い影を落としていた。結婚直後から始まった夫の暴力は、ついには幼いマサトにまで及んでいたのだ。時々見せる暗い表情にはそんな背景があったのだ。しかし深く傷ついた幼いマサトの心を癒そう、などという大それた気持ちはなくワシもカミさんも、ただただ丹精込めて愛情を注いだ。マサトに愛情を注ぐことはワシらの喜びでもあり、それによってワシらが救われていた部分もあるのだ。何よりこの小さな新しい家族の成長は、できたての夢と希望を芽生えさせ、しっとりとした情のある幸福感を、ワシら老夫婦の生活に流し込んでくれた。そして今も心地よい涼風を吹き込み続けている。それを考えれば、この3年間はワシらがマサトに感謝しなければならないのかもしれない。そして明日はとうとう小学校の入学式……

ワシの、亡くなった両親が娘にそうしてくれたように、十日ほど前ワシら夫婦もマサトにランドセルを買ってやった。明日の入学式を控え、今目の前で新一年生のセットをすべて身につけ、お披露目をしてくれた。最後にランドセルを背負ったマサトはとてもまぶしかった。まぶし過ぎて、まぶし過ぎて……。娘の時も入学式の前夜、こうしてお披露目をした記憶がある。そして遥か昔、ワシ自身もそうであったような気がする。今そこに立っているのはワシであり娘であった。命をつないでいる実感が込み上げてくる。孫への愛しさは自分自身への愛しさでもあった。

翌日の入学式には、娘とカミさんが付き添うことになった。幼稚園の時はワシが強引について行ったので、今度はカミさんが自分の権利を主張した。朝家を出る3人を、玄関でワシが見送る事になった。学童帽を目深にかぶったマサトが靴を履き、ワシの方に振り返ると直立して言った。

「……じいじ、ありがとう！　行ってきます！」

不意をつかれたがワシも答えた。

「おう、行っておいで」

マサトは元気よく家を出て行った。しかし通りに出る辺りで立ち止まり、カミさんと娘をそこに残してワシの方に駆けて戻ってきた。そして少し難しい顔をして言った。

「じいじ、ありがとう……これからもずっと一緒にいてね」

そして再び通りの方に向かいワシの視界から消えた……

この世でクロスしたワシとマサトの人生、残された時間はそれほど多くない……

3章

時は流れた。ワシも役場を退職し、交代するように娘が役場に就職した。もともと明るく社交的な娘であったから、窓口係として請われ職に就いた。そしてマサトも4年生になった。2年生の時から少年野球を始めたマサトは、見違えるようにたくましい男の子に成長した。しかし無口な性格はそのままで、2学期学級委員にも選ばれた時には、周りから押しつけられたのでは、とワシやカミさんは心配した。そんな矢先に家庭訪問があり担任の教師からこんな事を言われた。

「マサトさんは、確かに今時の子には珍しく口数の少ないお子さんです。そして無言実行タイプです。うまく言えなくてすみませんが、例えば教室に紙くずが落ちていれば、誰が落としたかは追求せず、何も言わずに拾ってゴミ箱に捨てます。黒板消しが汚れていて、当番が忘れていると黙って外に持って行き、はたきを掛けきれいにしてくれます。彼は何でも行動で示してくれます。それから私もずいぶん彼には救われているんですよ。授業中一つの話題に盛り上がって騒がしくなってしまい収拾がつかなくなったときも、彼が私の顔色を察して一言『シーッ！』って言うと、クラス全体が静かになるんです。そんな彼が学級委員になるのは、クラス全員が納得しています。どうぞご心配なく。そして成績もすべての教科に力を発揮していますから、男の子にも女の子にも人望が厚いんですよ」

担任が話し終わってようやく腰を上げそうになった頃、娘は一つ心に引っかかっていることを、思い切って聞いてみた。

「先生、マサトが3歳の時に私が離婚したため、マサトには父親がいません。家で本人がそれを気にする素振りを見せたことはありませんが、友達との会話で必ず父親の話が出ると思います。そんなときマサトはどうしているのでしょう」

担任の女性教師は、えっと言うような意外な顔をして

「あら、お母さん。1学期末に編集した学校文集はごらんになっていませんか。1冊ずつお配りしたはずなんですけど。私今日持っていますから、どうぞお読みになってください」

そう言うと1冊の文集を娘に手渡した。初めて目にするものだった。ページをめくり4年生の欄を見つけて、娘はしばらく黙読していたが、少し目を赤くしてワシの方

を向き
「お父さん、声出して読むわね」
と言った。ワシも
「ああ、読んでくれ。どうせ老眼鏡なしでは読めんから」
と答えると、娘は一呼吸おいてから読み始めた。
〈僕にはお父さんがいません。小さい頃にお母さんが離婚したからです。そのことでお母さんは僕に「ごめんね、ごめんね」ってよく言います。でも今までお父さんを欲しいと思ったことはありません。僕にはじいじがいるからです。じいじは僕のお父さんではありませんが、お母さんのお父さんだから同じ事です。僕のじいじはすごいです。去年は〇〇市民マラソン大会で４２．１９５ｋｍを４時間１１分で走り、６０代のカテゴリーで２位になりました。そんなすごいじいじに、僕は２年生の時から野球を習っています。キャッチボールをしていて、じいじが本気で投げると僕のグラブをはじいてしまいます。僕も早くじいじのようなボールを投げたいです。〉
胸が詰まってワシは言葉が出ない。いつもキャッチボールをしている時は怒ったような顔をしてワシを睨みながらボールを追いかけていたマサトが、そんな風に思っていてくれたなんて…あとどれくらいマサトと一緒に暮らせるのだろう。同じ空間と時間をあとどれほど共有できるのだろう。この世でワシに残された、マサトとの時間を考えたとき少しだが寂しくなる。
幸せな日々ばかりではなかった。マサトが５年生のある日、カミさんが入院した。健康診断にひっかかり、再検査の結果乳ガンと診断された。末期というわけではなく、乳房を切除すればほぼ大丈夫であろうという診断であった。この一部始終についてワシら家族は最初から最後までオープンに話していたので、マサトにも当然伝わっており病気を十分理解していた。常に気丈に振る舞い家族を支え続けてきたカミさんの窮地は、家族に少なからず動揺を与えた。そしてカミさんが切除手術を決心した夜、マサトが泣いた。ボロボロ涙を流しながら
「ばあちゃん、ごめんよぉ。僕はばあちゃんのために何もできないよぉ。今までばあちゃんはたくさんのことをしてくれたのに、今僕にできることは何もない……悔しいよぉ……」
そう言って泣くマサトをカミさんはギュッと抱きしめて
「マー君、ありがとう。そう思ってくれるだけでばあちゃんは嬉しいし、元気になろ

うって、勇気がわいてきたよ。だからマー君は何もできないんじゃなくて、ばあちゃんに勇気をくれたんだよ。ありがとうね」

その二人の姿を見てワシと娘は言葉もなく涙に濡れた。マサトの優しい気持ちがカミさんに伝わり、カミさんもそれをしっかりと受け止めた。この場面は一生忘れまい。ピンチになったとき心が一つになる、ワシらは本物の家族になれたのかもしれん。

2週間後カミさんは、無事手術が終わりしばらく個室で加療する事になった。マサトは野球の練習がある日を除き、平日も土曜日も日曜日もカミさんのいる病室に通った。そのせいか、カミさんはグングン回復し予定を1週間短縮して退院を果たした。もしかしたらマサトにとってカミさんはもっとも大事な存在なのかもしれない。マサトが家に来てからは、ただただ甘いワシと違って、母親の不足している部分を補うように日々生活習慣・しつけ・善悪の区別など、ある時は父親のような厳しさでマサトに接してきた。それは深い愛情に裏打ちされたものであり、子どもは敏感にそれを感じ取るのだろう。

その晩退院を祝い皆で御馳走を囲み乾杯した。マサトの嬉しそうな掛け声が響く。

「ばあちゃん、退院おめでと～！　かんぱ～い！」

「マー君が毎日見舞いに来てくれたから、ばあちゃんこんなに早く出てこられたよ。ありがとう、マー君……」

カミさんはそう言って声を詰まらせた。乳ガンの発見・宣告を受けて以来ずっと気丈に振舞っていたが、この夜初めて涙を流した。

4章

マサトが6年生の夏。娘の提案で初めて、家族4人で海辺の町に旅行に出かけた。小学生最後の夏を、孫と祖父母の思い出づくりに、と娘がプレゼントしてくれたのだ。朝早く家を出て4人揃って電車に乗った。これも初めての経験だ。主要駅で新幹線に乗り換え一路目的地へ。新幹線の中ではマサトが持ってきたトランプにみんなで興じた。それに飽きたらしりとりゲームだ。何をやっても家族4人でやれば楽しい。笑い声が絶えない。他のお客さんに迷惑にならぬよう3人をたしなめるが、楽しさ嬉しさは押さえきれない。目的の駅には昼頃ついた。宿のチェックインまで時間があるのでレストランで食事をとる。その後マサトの希望で水族館に行った。どこへ行っても楽

しくて嬉しい。どの瞬間も愛しくて一つ一つの場面が宝物だ。ワシは家族４人でいられることの喜びをかみしめた。

宿にチェックインすると夕食までの時間、風呂へ行くことにする。カミさんに女風呂へ行くか、とからかわれたマサトは口をとがらせてワシと男湯の扉を開けた。脱衣所の鏡の前で隣に並んだマサトの身長が、もうワシとあまり変わらないことに気が付いた。若くたくましい肩がまぶしかった……まだ入浴客の少ない湯船に二人並んで浸かった。

「マサト、３歳でワシらのところへ来た日のこと覚えているか」

「うん、覚えているよ」

「その時ワシと会ってどう思った？」

「う～ん、何だかよくわからないけど、恥ずかしかった」

「ばあちゃんはどうだった？」

「ばあちゃんはね、たくあんの香りがして、あったかくて……嬉しかった」

ずっと気になっていたことを聞くことができてワシはすっきりした。やはり覚えていてくれたか……ワシは、あの日のマサトの硬くこわばった表情を思い出すと、今でも不憫で涙がにじむ。３歳の幼い心は見知らぬ場所に来て見知らぬ人に会い、きっと不安でいっぱいだったに違いない。この子にもうあんな思いをさせてはならん。

洗い場に出て身体を洗う。マサトは５年生の頃から風呂には一人で入るようになったが、それまではほとんど毎日ワシがマサトを風呂に入れていたものだ。ちっちゃな背中を何回洗っただろう。あのちっちゃな背中を洗えないのがちょっぴり寂しい。今、チラッと垣間見たマサトの背中はいつのまにか大きくたくましくなっていた。

「じぃじ、後ろ向いて。僕が背中を流すよ」

そういってマサトはワシの背中を洗い始めた。

「じぃじ、これからはじぃじ、じゃなくておじいちゃんって呼ぶよ。だってじぃじ、って赤ちゃん言葉だろ？　いいでしょ？」

「ああ、いいとも」

少し寂しさはあったが、これが成長の証だ。身体も心も大人になっていくんだ。背中が洗い流されるたびに触れるマサトの手が、ワシを守っているような錯覚に陥った。

（こんな優しい時間が永遠に続けばいい）

マサトを連れて帰ってきてくれた娘に感謝、心の中で手を合わせる。
夕食の配膳が始まった。さすが海辺のリゾート地である。豪華な海鮮料理が卓からはみ出さんばかりに並んでいる。すべて出そろい仲居さんが部屋を出て行った。マサトはジュース、大人は交互にビールをついだ。娘が改まった様子でかしこまる。
「お父さん、お母さん。本当にありがとう。早いものでマサトも来年は中学生、ここまで来れたのが夢のようです。離婚することが決まってからは将来が全然見えなくて、不安で不安でたまりませんでした。電車に乗って大城の駅に降りてお父さんの顔を見たときは、正直ホッとしました。でも申し訳ない気持ちも重なって大泣きしてしまいました。あの時のことを考えると今の幸せが信じられません。お父さんやお母さんには何一つ恩返しができなくて……今日はささやかですけど私の感謝の気持ちを込めて企画しました。どうかこれからもマサトと私をよろしくお願いします」
最後はふるえて泣き声になった……少ししんみりとしてしまった。しかし悲しいしんみりではない。心がホカホカしてくるような温もりがあふれていた。そしてワシもカミさんも、娘の言葉に心を揺さぶられた。
（一番頑張ってきたのはお前じゃないか）
娘にそう言ってやりたかったが、言葉にすると号泣してしまいそうで、心の中でそっとつぶやいた。そんな雰囲気を察してマサトがジュースの入ったグラスを掲げ、
「さぁ、乾杯しようよ。いい？　カンパーイ！」
そう言うとマサトはそれぞれとグラスを合わせる。
「おじいちゃん、カンパーイ！」
「おばあちゃん、カンパーイ！」
「ママ、カンパーイ！」
マサトは早速じぃじをおじいちゃん、ばあちゃんをおばあちゃんと新しい呼び方で言った。正確に言うと9年、この間娘も母親として大人として成長したように思う。離婚という負い目をどこかに抱えながらも、必死でマサトを育て働いてきた。若い頃は明るいお調子者でよく失敗もした。今の娘はその頃の積極性は失われ慎重な行動が目立つが、落ち着きのある物腰と責任感を漂わせ、成熟した大人になったと思う。ワシとカミさんが育てたんだ。それほど間違った親にはなるまい。男を見る目は少しなかったが。

この夜、旅館の広い日本間に、初めて４人並んで寝た。

５章

楽しい時間はあっという間に過ぎていく。翌日１０時前に宿をチェックアウト。荷物を駅に預け、マサトが楽しみにしていた海水浴に出かけた。海を見るのはワシもカミさんも何年ぶりだろう。海岸はすでに海水浴客であふれていた。遮るもののない夏の日差しと大海原が田舎暮らしの閉塞感から、ワシら家族をゆっくりと解放してくれた。それでも午後２時には、まだ盛況な砂浜を後にした。マサトも泳ぎ疲れワシらも２日間の旅を存分に満喫した。電車の時間調整のため、駅前の喫茶店で氷を食べながら、電車の到着時刻を待つ。そして家族であることの喜び、もうこれ以上は手からこぼれてしまいそうな幸せを噛みしめながら新幹線に乗った。この時ワシらの家で起こっていた出来事など知る由もなく……

大城の駅に着いたのは夜の８時半だった。駅舎前に駐車した軽のバンにお土産と一緒に４人乗り込み家に向かった。風呂に入り旅の疲れを癒していると、１００ｍほど離れた隣家のおキョさんが尋ねてきた。留守中に男の客が来たという。年格好・背格好などを詳しく聞いているうちに、娘の顔色がみるみる変わった……

「あの人だわ……」

カミさんが心配顔で

「あの人って、敏夫さん？」

カミさんが口に出した名前は娘の元亭主の名だ。

「多分、間違いないわ」

娘は一点を見つめながらそう答えた。ワシはよく事情が飲み込めず

「敏夫って前の亭主か？　何だ今ごろ……」

とつぶやいたが、何やら得体の知れない不安に襲われた。

翌日は日曜日。皆眠れぬまま朝を迎え朝飯を食べていると玄関を開ける音がして

「ごめん下さい、すみません」

と聞き覚えのある声が響いてきた。空気がピーンと張り詰めた。茶碗と箸を持つ手が止まった娘。しばらく考えていたが、意を決したように立ち上がる。ワシはそれを制し、

「待て、まずワシが話をしてくる。お前はここにいろ。マサトは部屋に行ってなさい」
そう言ってワシは玄関に向かった。東向きの玄関には明るい光の中、逆光で撮った写真のように影だけが立っていた。
「僕です、小坂です。ご無沙汰してしまいました。突然おじゃまして申し訳ありません」
光になれてきたワシの目が確かに小坂敏夫をとらえた。
「ああ、久しぶりだ。まぁ、挨拶などどうでもよい。今日は何のご用ですか」
心臓の高鳴りを抑え、できるだけ感情を殺して尋ねた。
「恵美、いえ恵美さんとマサトに会いに来ました」
自分の立場を理解しているのかいないのか、意外とはっきりとした物言いだ。
「会いに来ました、と一方的に言われても突然のことでワシには即答はできない。娘やマサトの意志も聞いてみないと……」
すると小坂は玄関の土間に膝をついて
「では今聞いてみてください。お願いします。この通りです」
そう言って小坂は頭を土間に押しつけた。ワシは息を整えてから
「とにかく突然のことで、ワシも家族も頭の中がぐちゃぐちゃだ。申し訳ないが時間をくれないと整理して考えることができない。申し訳ないが明日の晩もう一度来てくれ」
小坂はワシをにらみつけるように頭を上げながら
「わかりました。明日の晩おじゃまします。その時会わせてもらえるんですね」
「それはわからんが、それなりの返事はしよう」
ワシの言葉に不満がありそうな、そして何か言いたげな顔で小坂は玄関を出て行った。
旅の疲れを癒すはずの日曜日であったが、朝から難問を抱えてしまった。マサトも加え家族４人再び居間に集まった。玄関での一部始終を皆聞いていたようだ。娘が口を開いた。
「ごめんなさい、お父さん」
「いや、あんな対応しかできなかったが、少し時間ができた。みんなで考えよう」
「ありがとう、お父さん。いきなり会っていたら、きっと気が動転して何を言ってしまったかもわからなかったわ。時間を作ってくれて本当によかった」

カミさんが口を開いた。
「あれから、もう9年も経つ。いったい何のために来たんだろうかのう。確かに自分の子どもに会いたいって言う気持ちはわかるが」
娘は毅然とした口調で
「私は会ってもいいけどマサトには会わせたくない！　だって私とマサトを……」
最後は、暗い思い出がよみがえってきたのか涙が頬を伝う。
「ワシだって同じ気持ちだが……マサト、お前はどうだ」
ずっと黙って聞いていたマサトが口を開いた。
「ママを悲しませるような人にママを会わせちゃダメだ。僕もそんな人には会いたくない」
マサトの言葉が家族の気持ちを代弁していた。ワシがまとめた。
「わかった。では二人とも小坂には会わない、ということでいいな。しかし何かあるといけない。二人は明日マサトが学校から帰ったら、郵便局のタネさんのところに行きなさい」
皆がうなずいた。一家の主としての責任と、娘と孫を守りたい気持ちでいっぱいであった。
翌日の夕方、小坂が再び訪ねてきた。ワシはあがりかまちに正座してきっぱりと言った。
「申し訳ないが、娘もマサトもあんたとは会いたくないと言っておる」
小坂は血相を変えた。目つきが尋常ではない。
「約束がちがう！　お願いだ、一目会わせてくれ！」
座っているワシの膝元に迫ってきて頭を下げる小坂に、さらにワシは言った。
「この9年娘とマサトは二人で一生懸命生きてきた。あんたの事を一生懸命忘れようと毎日を必死で暮らしてきた。やっと平穏な日々を歩み始めたところだ」
小坂はゆっくりと頭を上げてワシをにらみつけた。
「騙したな、どけー！」
ワシの両肩を掴み玄関の土間に引きずりおろし、倒した。靴のまま上がり込みカミさんのいる居間に向かった。ワシは立ち上がり後を追う。居間では今にも殴りつけそうな勢いの小坂がカミさんの肩を掴んでいる。
「ばばぁ、恵美を出せ！　マサトはどこだぁ！」

小坂は完全に常軌を逸している。危険を感じたがカミさんを守らねばならない。
「何をする！　離せ！　おまえは今自分が何をやっているのかわかっているのか！」
そう言いながらカミさんと小坂の間に無理矢理倒れ込んだ。カミさんの肩を掴んでいた手がはずれた。体勢を立て直そうと立ち上がったワシに小坂の右の拳が振り下ろされた。顔の左半分に大きな衝撃を感じ、気が遠くなった。後で聞けばほんの数十秒間ワシは気を失っていたようだ。次に気が付いたときは、小坂が玄関を飛び出していくところだった。カミさんの話では、小坂はワシを殴った後２階の娘とマサトの暮らす部屋をのぞき、いないことを確かめ、再び居間へ戻ってきて
「必ず、連れ戻してやるからな！」
と捨てぜりふをはいて出て行ったそうだ。気丈に振る舞っていたカミさんも恐怖から解放され安堵したのか、涙を流した。ワシもふらふらしていたがカミさんに声を掛けた。
「けがはないか、今日はもう来んだろう。大丈夫だ」
頷くカミさんの頬を涙が一筋二筋伝う。カミさんにとって７０年近い人生の中で、最も怖い瞬間だったかもしれない。それでもカミさんはワシを気遣って
「おじいさん、目の下が腫れてきたよ。はよ冷やさんと……」
そう言って台所へ立った。ワシは娘とマサトを預けた、郵便局のタネさんのところに電話をかけた。娘に一部始終を話した。娘は泣いた……悲しい晩だった。

最終章

「ずっとうちにおってもええよ」
とタネさん言ってくれたが、これ以上迷惑をかけられない。娘も何かを決心したように
「明日は私が会って話をするから・・・お父さんもお母さんもごめんね。今から帰ります」
そう言ってまた泣き声になり電話を切った。その晩９時頃娘とマサトが家に戻ってきた。青く腫れ上がったワシの顔を見てマサトがワシのところへ駆けてきた。
「おじいちゃん！　大丈夫？　あいつが、あいつがこんな事をしたんだね……僕は絶対、あいつを許さない！」

マサトはそう言って思い詰めたように一点を見つめた。そんなマサトを見てワシも悔しさが込み上げてきたが、自分自身を落ち着かせるためにも、努めて冷静に話をした。

「マサト、お前は手を出してはいかんぞ。お前がけがをしたらママもばあちゃんも悲しむ。必ずワシらが解決するから……」

必ず、と言ったものの自信があるわけではなかったが、娘と孫を守ってやらなければ、という責任感がワシを奮い立たせていた。娘に向かって言った。

「明日小坂がまたやってきたら、もう一度ワシが話をする。やつが落ち着いたところでお前を呼ぶから、自分の意志をしっかりと伝えなさい。マサトは2階にいるんだ、いいな？」

それを聞いていた娘はうなずきながら、きっぱりと言った。

「わかったわ。お父さんの言う通りにする。私が必ず小坂を説得します」

そばで惚けたようにカミさんがつぶやいた。

「あんなに乱暴な人だとは思わんかった。ホントにびっくりした……恵美もマサトもあんな人と暮らしておったんか。辛かったろうな」

「おかあさん、ごめんなさい！」

娘はそう言うと、畳に突っ伏して嗚咽を漏らした。これまで何十年も平和でのんびりとした田舎生活しか知らないカミさんに、大きなショックを与えてしまったことが、娘の我慢の限界を越えてしまったようだ。やっと身体を起こしぽつりぽつりと話し始めた。

「小坂は結婚直後に仕事をクビになったの。私がパートに出たわ。私がわずかなお給料を持って帰ると、それを取り上げてパチンコに行ってしまうの。そんなときマサトを妊娠したの。あのときお母さんにお金をパート先に送ってもらったでしょう。あの人が使っちゃうから……あのお金、すごく助かったわ、お母さん。ありがとう。私マサトを生んで10日後には仕事に戻ったの。運良くパート先には託児所もあったし、オーナーが私を必要としてくれたから。子供が生まれればあの人も少しは変わってくれるかしら、なんて少し期待してたけど無駄だった。それどころか暴力はどんどんひどくなったわ。『帰りが遅い』と言っては殴り、『男でもできたのか』と言っては蹴るの。そんな生活が2年も続いた。それでもがんばれたのはマサトがいたから……マサトだけが私の生きている証だった。でもある日仕事先の都合でどうしてもマサトをあ

の人に半日預けなければならなかったの。仕事が終わって急いで家に戻ったわ。ドアを開けるとマサトがおびえきった顔で飛びついてきたの。見るとおでこやこめかみが紫色に腫れ上がっていたわ。小坂に聞くと『言うことを聞かないからしつけてやったんだ』と吐き捨てたわ。その時私の中で何かが終わったの。私が我慢していても何も変わらない。むしろ悪くなってしまう……そしてあの日ここに帰ってきたの」

いままでワシらも聞かなかったが、別れたいきさつを初めて娘は詳しく話してくれた。話の途中からボロボロと涙を流していたカミさんが言った。

「二人とも悲しかったろうな、苦しかったろうな。もっと早く気が付いてやればよかったのう。すまんの、すまんの」

ワシは改めてこの、大事な3人の家族を守らねば、と決心していた。

翌日の夕方も小坂はやってきた。娘が仕事から帰宅した直後に玄関の引き戸が「ガラガラ」と鳴った。挨拶もせずに小坂は上がり込み、居間にいた娘を見つけると駆け寄るように座卓を挟んで娘と対峙した。

「頼む！　やり直してくれ。俺にはお前しかいないんだ、暴力も振るわないし仕事も見つけるから」

一方的に話す小坂に娘は

「ごめんなさい、私たち9年前に離婚してもう他人です。マサトだってあなたの顔さえ覚えていません」

小坂はそれを遮るように

「仕事はもうじき見つかるんだ、先週面接に行っていい感触だったんだ、だから必ずお前らを食わしていけるから」

「私たち二人の生活は、ここで父と母に支えられてやっと安定してきたばかりなの。今マサトと私はやっと幸せを掴みかけています。あなたにできることは何もありません」

「俺たち夫婦だっただろ？　愛し合っていたじゃないか、違うか？」

「そんなときもありました。でも今はそんな気持ちにはとてもなれません」

「お前、男でもできたのか」

「あなたが私たちにしたことを思い出してください。それを思えばあなた自身が私たちを捨てたのと一緒です。もう二度とここには来ないで下さい」

「やっぱり男がいるのか、どこのどいつだ」
「そんな人はいませんが、いたとしてもあなたにはまったく関係のないことです。私たちはまったくの他人なんですから」
しばらく徒労の会話が交わされた。訳のわからない小坂の話と筋の通った娘の話とでは一向にかみ合うことがない。どこまで続くかと思われた堂々巡りにシビレを切らしたのか、とうとう小坂は言葉を失い座卓を回りこみ娘に接近した。ワシは危険を感じ台所のすりこぎ棒を掴んでいた。娘が少しあとずさった。すると、いつの間にか娘の背後にマサトが立っていた。小坂が気が付き声をかけた。
「マサトか！　マサト、俺だ、お父さんだ！」
マサトはその言葉を無視するように
「僕にお父さんはいないよ、おじさん。これ以上僕のお母さんやおじいちゃん、おばあちゃんに何かしたら、僕が許さない！」
と言い放ち、両のこぶしを握りしめ立ちはだかっていた。小坂は口を半分あけて何かを言いたげだったが、きっぱりと「おじさん」と、言い放ったマサトの迫力に負けたかのように、肩を落とし力なく立ち上がり玄関を出て行った。
ワシらはしばらく呆けたように言葉のない静寂の中にいた。ホッとした、弛緩した空間の中でワシは一部始終を反芻していた。小坂が本気でマサトに掴みかかれば大人と子ども、ひとたまりもなかったに違いない。しかし自らの息子に三行半を突きつけられたショックは小坂を打ちのめした。それにしても、大人たちが大きなエネルギーを費やしても先の見えなかった状況を、マサトが一瞬で解決したことにワシは大きな感動を覚えていた。そしてまだ仁王立ちしているマサトの姿に家族を守ろうとする意志を見た。誰が教えたわけでもないのに。
（お前が本当にワシの孫でよかった……）
マサトはしばらく小坂が消えていった玄関を睨みつけていた。そして我に返ると真っ先にカミさんの方に駆け寄り
「おばあちゃん！　だいじょうぶ？」
そう言って、もう自分よりは小さくなったカミさんを抱きしめた。この家で最も悲しませてはいけない人をマサトはよく知っている。

この９年間、カミさんの手術で家族が沈んだこともあったが、何とか全員で乗り切り、幸せばかりを享受してきた。幸せすぎたのかもしれない。今度ばかりは大きな衝撃をワシらは受けた。しかしその傷口も少しずつふさがっていくに違いない。ワシらはもう正真正銘の家族なんだ。お互いにかけがえのない存在になった……それだけでいい、それだけで。